

書 評

高田 明. 『相互行為の人類学—「心」と「文化」が出会う場所』新曜社, 2019 年, 248 p.

飯田 卓*

相互行為の人類学とは

人類学は、ひと頃に較べるとずいぶんいろいろな対象にとり組むようになった。本書に題されている相互行為とは、二者またはそれ以上の人たちが相互に影響しあいながら対面的におこなう行為というほどの意味だが、このことばになじみがない読者は、またあらずの研究対象が現われたと思うかもしれない。しかしそれは誤解である。それどころか、人文科学研究所の谷泰がこの問題にとり組んで以来、京都大学は、じつに 40 年近くにわたってこの問題への取り組みを先導してきた [たとえば谷 1987]。ただし、相互行為への着眼は、社会学者ゴッフマンのほうが早い。著者の高田明は、谷らの議論を正統なかたちで受け継ぎつつ、関連する内外の潮流を「相互行為の人類学」という旗印のもとにまとめあげた。その意味で本書は、この分野の蓄積を見わたす網羅的なレビューの著作であると同時に、著者の強い独創性をも帯びている。

本書はまた、具体例を豊富に提示することで、大学院レベルの初学者にむけてのまたとない手引書となっている。さらに、本書のもとになった講義で出た質問もふんだんに掲

載することで、学部レベルの読者に対しても、当該分野の理解に必要なさまざまな予備知識を提供している。このように本書は、当該分野の概要を幅広い読者層に示す好著でもある。

本書の内容を章ごとにみていこう。第 1 章「相互行為の人類学への招待」では、相互行為の人類学の野心が提示される。それは、主として「心」という個人的・個体的現象を扱ってきた心理学と、主として「文化」という集合的現象を扱ってきた人類学との架橋である。相反する（とみなされがちな）アプローチの統合により、バランスをとりつわれわれの経験世界に近づいていくことが「相互行為の人類学」の目指すところである。第 2 章「理論と方法」では、文化人類学ならびに言語人類学において相互行為がどのように記述・分析されてきたかがレビューされる。そこでは文化人類学と言語人類学の関係といった基本的な解説から、会話分析の考えかたや記述方法の提示、ターン・テイキングや基本連鎖、修復、参与枠組みとフットイングといった基本概念の説明にいたるまで、幅広い話題におよんでいる。初学者は、まずこの 2 つの章を熟読することで、相互行為の人類学にとり組む心構えを身につけることができよう。

5 つのテーマ

続く 5 つの章では、相互行為の人類学においてしばしばとり上げられる話題に焦点を絞り、それぞれのテーマに関する研究動向を示している。いずれの章でも、著者が関わる

* 国立民族学博物館

プロジェクトの研究成果が惜しみなく提供されており、専門的でありながら具体性に富む内容となっている。本書がたんなる教科書にとどまらず、最新の研究成果を紹介する独創的著作ともなっている所以である。このことは、著者をして「(本書は) 研究の成果を網羅的に示したものではない」(p. ii) と言わしめる理由ともなっているが、それは謙遜にすぎず、当該分野の重要な論点がかんりのていど網羅されていると評者にはみえる。

各章の論点を詳しく述べることは、著者の研究に関連した膨大な研究動向を要約することにほかならず、かぎられた紙面ではとうていはたすことができないので、本書を読んでいただくことにしよう。そのかわりこの書評では、各章の標題と相互の関連を、評者なりに示したい。著者の考えといくぶん異なる点があるかもしれないが、あらかじめご了承ください。

第3章「社会的認知」は、周囲の社会環境や自己に関する認知のうち、社会文化的拘束を受けやすい側面に焦点を当てている。しかし著者は、文化の壁を強調するのではなく、あらかじめ背景的知識を共有しない他者どうしが共通理解に到達しうる点を重視する。そこで次に問題となるのが他者とはなにかということで、第4章「他者理解」ではこのことに焦点を当てている。とりわけ注目されるのは、ヒトとチンパンジーの相互理解を論じた著者の原著論文の事例である。近年は霊長類学と文化人類学の対話が進みつつあるが、ヒトとそれ以外の霊長類との相互行為をとり上げたモノグラフはまだ多くなく、動物を究

極の他者に定位する近年の民族誌を先がけている。ヒトとチンパンジーは自己表現においても認知においても遺伝的に異なっているにもかかわらず、相互行為を重ねることで共通の文脈を確立すると著者は論ずる。この点は、著者の同僚である木村大治 [2018] が近年詳しく論じていることがらであり、研究のフロンティアに関する両者の対話を彷彿とさせる。

同じく文脈が共有されていない状況でおこなわれるのが、乳幼児とおとなとの相互行為である。第5章「発達と社会化」ではこの点が論じられる。発達心理学では必ずしも強調されない「相互行為における文脈の確立」に著者は一貫して着目しており、著者の研究姿勢がよく現われている。また、第6章「言語とコミュニケーション」でも、著者はこの視点を一貫して維持している。示されている事例は、もちろん、まったく言語を理解できない乳幼児よりはやや年長の子どもである。相互行為に言語が介入してあらたな相に移行するようすが、具体的に提示されている。

第7章「感情」では、文脈という前章までの通奏低音がいったん後景に退く。じっさい、感情というテーマは、相互行為をつうじて社会的に構成されるというよりは個人の心理過程としての側面が強く、第6章までのテーマとの共通性が低い。それにもかかわらず著者は、個人の内面に視点を移すのではなく、感情にまつわる語彙をとおして感情が社会的に構成されることがあると指摘し、あくまでも社会的文脈から個人の心理過程を捉えようとする。感情に関する知見は、相互行為

の人類学においてまだ蓄積される途上にあるようだ。個人に由来する（としばしば考えられている）ことがらとしては、感情としばしば同一視される感覚や情動のほか、意図や期待といったより論理的な心理過程も含まれる。これら個人的動機の社会的構成については、まだまだ解明すべき点が多い。かくいう評者も、社会的なアイデンティティ構築における感覚の重要性を論じたことがあるが〔飯田 2010〕、相互行為との関連ではまだまだ論じたりないと痛感している。ぜひとも本書の著者が先頭に立ち、本書の読者たちを率いて、未開拓の領野を拓いていただきたい。

今後の課題と展望

終章である第 8 章「結論にかえて」は、第 7 章までの論述が要約されるとともに、本書全体の事例をふまえて、各章に通底していながら明示的に述べられていなかったことがらがあらためて明示される。それは、心的カテゴリーの脱構築（第 2 節）、文化的実践、慣習、社会制度（第 3 節）、そしてフィールドワークの魅惑（第 4 節）である。ヒトどうしのコミュニケーションは、あらかじめ定まった見取り図に従って展開していくのではなく、コミュニケーションの場に応じて修正され、その場で創発されていく。文化や慣習、社会制度といった集合的に説明されることがあっても、そうしたミクロな偶発性の積みかさねによって次第に組織化される。そのプロセスを簡単に述べれば、次のとおりである。さまざまな記号論的パターンが社会的に共有され、それを共有する者たちのあいだであら

たなコミュニケーション形式が生まれると、「コミュニティ化」とでも呼ぶべき集合現象の実体化が進んでいく。しかし著者の強調点は、そうしたコミュニティが必ずしも実体として捉えうるのではなく、つねに構成され変容されているということである。

最後の「フィールドワークの魅惑」についての 1 節は、やや唐突ながら、研究者があらたな理解や発見に到達するうえでフィールド経験が重要であると説いている。社会学者高橋由典のいう「体験選択」、作家村上春樹の「長い旅」、霊長類学者伊谷純一郎の「アフリカの毒」など、いろいろな例が引かれているが、要するにフィールド体験によって自分にとっての日常を相対化することが相互行為の人類学にとっても不可欠だといえる。なるほど、相互行為の人類学が着目する相互行為のかなりの部分（ひょっとすると大部分）は、日常的な場面でくり広げられる。しかし、それをあたり前のしかたで見たり記述したりしても、発見は得られない。ビデオ映像記録にせよ会話分析にせよ、あたり前とは異なる方法を駆使して日常を異化してこそ、日常を成り立たせる構造はあらわになる。場所の移動がともなわなくとも、未知をかいま見るといふ心構えが、相互行為の人類学を進めていくうえでは必要なのだ。

考えてみれば、本書は矛盾に満ちた本である。日常を非日常として見るという方法、かぎられた個人の行為を出発点として文化や社会に到達しようという目的意識、そして、独創的なレビューによって専門的に初学者をいざなうというスタイル。不可能にもみえる矛

盾の克服を本書がみごとになしとげている理由のひとつは、著者の力量もさることながら、相互行為の人類学という分野の性格にもよるのかもしれない。著者によれば、「地に足の着いた事例の丹念な分析は、凡百の抽象的な比較や考察を凌駕するというのが人類学のもっとも基本的な教えの一つである」(p. ii) という。思えば、1990年代に近衛ロンドの大学院生たちがよく口にしていた言葉のひとつに、「神は細部に宿る」という聖書の箴言があった。細部に徹底的にこだわることで普遍にいたろうとする学問的営為の力強さが、本書の随所にも伝わっている。

引用文献

- 飯田 卓. 2010. 「ブリコラージュ実践の共同体—マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80.
- 木村大治. 2018. 『見知らぬものと出会う—ファースト・コンタクトの人類学』東京大学出版会.
- 谷 泰編. 1987. 『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所.

川田牧人・白川千尋・関 一敏編. 『呪者の肖像』臨川書店, 2019年, 292 p.

村津 蘭*

人はどのようにして呪術を学び、呪者となっていくのか。こうした疑問をもとに、日本、東南アジア、アフリカ、太平洋諸島から中世ヨーロッパに渡る幅広いフィールドにお

いて、研究者たちがそれぞれに出会った呪者を描き出す。呪者とは、超越的な力を使い望ましい状況を得ようとする営みを行なう人、すなわち呪術を執り行なう人のことであるが、本書ではまず、その描かれる呪者の人物像に惹きつけられるだろう。不幸や鍛錬、或いは幻想的な旅の経験などを経て、目に見えない力と交渉する技術を身につけた呪者たちが、各章で人間味の溢れる存在として現れてくる。本書の終章において関一敏は「呪術者の肖像（阿部年晴）に焦点をしばって、『呪術世界に入る』ことと『半分のまじめさ』（Mauss, 1904）にふれてみる必要」（p. 270）を説くが、本書は、時に胡散臭く時に献身的な呪者のふるまいや人間像を通して、まさに「呪術世界にふれる」ことができる本となっている。

それらの人物の魅力はむしろ、各執筆者のフィールドで培われた信頼関係によって引き出されているものだが、方法論的には「呪者を描く」という本書を通じてのテーマに支えられているといえる。呪術・宗教・科学というカテゴリーを考えた際、誰でもが結果を再現し得るとされる「科学」と比して、「呪術」は呪者自身の個人的資質や技術に基づいている。本書の表現でいうと、科学は離床度が高く、呪術は「離床度（＝代替可能性）」(p. 271) が低い。すなわち、呪者個人に焦点をあてることによってこそ、人格と呪術的な効果の関係が掘り下げられ、呪術が成立し再生産される際の社会的合意とその性質が明らかになることが期待される。それによって、「呪術とはなにか」という根源的な問い

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科